

## 私の中の日文研

御 厨 貴

この三年、日文研の客員教授としてお世話になった。最初の二年間（二〇一二・四・二〇一四・三）は、「建築と権力の相関性とダイナミズムの研究」と題する共同研究を率いて、合計一回の研究会を、人の余りいない土曜日に行った。幹事の井上章一さんが、東京から上洛する研究者が多いため、アフターを場所を工夫してくれたり、最後には自らビアノリサイトを赤鬼で開いてくれたり、サービスにこれ努めてもらったことが、印象に残っている。これをうけて三年目（二〇一四年度）は、研究成果をブックスタイルに仕上げるため、全員が研究論文の執筆に集中した。おかげ様で、二〇一五年三月末には、『建築と権力のダイナミズム』というタイトルの論文集が、岩波書店から刊行される。出版の暁には、一同打揃って是非花の都で祝賀の宴を催したいと願っている。

何だか生真面目なつまらぬ報告書の文体になってしまった。いかん、いかん、これではいかん。実は私と日文研との付き合いは、けっこう古くからあるし、日文研に関わる研究者との交流も意外に深いものがあるのだ。ただどれもこれも、これというカタチになったコトが余りないものだから、つい今回は力んで「これだけやりました」みたいな書き出しになってしまった。スママセン。

そもその縁は、一九九〇年代前半の山折哲雄さんとの出会いに始まる。最初に相見えたの

は、日文研ではない。読売新聞の読書委員としてであった。あの頃の読書委員会は、日野啓三、養老孟司、鷺田清一といった個性豊かな人物が多く、委員会そのものも面白かったが、異業種混交のシンポジオンとなるのは、アフターの時だ。今は無き旧パレスホテルの1Fのラウンジを占拠してのオシャベリは談論風発でとても楽しかった。なかでも老若を問わず誰彼かわず座談の渦に巻きこんだのが、山折さんその人だった。宗教学者として無類に愉快な人だった。いつのまにか、「御厨さんは面白い。」「それいいよ」「どこかで発表したら」と常に前むきの山折さんに、硬軟色んな所にひっぱり出され、『共演』と相成った。そのうち最も印象に残るのが、日文研の山折さんの共同研究「日本人はキリスト教をどのように受容したか」に、ゲスト報告を頼まれた時のことだ。読書委員会アフターで、山折さんは「大平さんはクリスチャンでしょう。それあなた報告して」と言われた。一瞬虚をつかれた感があった。「クリスチャン宰相大平正芳の政治哲学」という苦しまぎれの題をつけ、知る人も少なく京都駅からエライ遠い所に参上し、ごによごによ語った覚えがある。その時驚いたのは、森岡正博という若い人が、「尾崎豊」をテーマに彼の歌声と共に報告をしたことだった。山折さんって本当にめちゃめちゃ広い人だなと感心した。ここで私は島田裕巳さんと運命の出会いを経験する。まだサリン騒動で日本女子大を追われるギリギリ前のこと。そしてここでの出会いから、断続的に島田さんとつき合い、やがて東大先端研の特任研究員として、「安全・安心」のプロジェクト研究に携わってもらうことになった。

さて山折さんの後日談。数年たって山折さんから報告書にするので、私の「大平クリスチャン宰相論」を原稿化せよとのお達しだ。さて困った。記憶にないのだ、報告の内容が。そこで一生懸命家捜ししたのだが、レジュメや資料の類もどこへ行ったものか、まったく出てこな

い。万事休す。大枝山のタヌキ（いるかどうか知らぬが）に化かされましと訴えたら、山折さんが「そうか、それではしようがない」と妙に納得したので、これまたビックリだった。

次の縁は、木村汎さんである。一九九七年から四年間の「危機管理と予防外交」というテーマの共同研究に誘われた。このたびはより主体的な参加を求められ、客員教授となった。参加意欲はあったものの、ちょうど私が都立大法学部から新設の政策研究大学院大学に移る最中で、上洛がままならず、木村さんには迷惑をかけっ放しだった。でもここで、原彬久さんや土山實男さんと顔見知りになったので、私は随分と得をした思いがある。木村さんの『おもてなし』の精神はすごかった。日文研は不便な所にあるからと、自宅を開放して奥様まで動員して我々にご馳走して下さったり、気のきいたレストランまで車を跳ばしたりと、それはそれはの氣遣いであった。だから欠席がちとなっても、食い逃げはいかと自らに言い聞かせ、今回は貧しいながらも成果を出した。「危機管理コミッティとしての復興委員会―『同時進行』オールの『ファイル』をめぐって―」が、木村汎編『国際危機学』（世界思想社、二〇〇二年）に収められた。ホッと安堵である。

ちょうどこの二十世紀末に重なるカタチで、小渕首相肝いりの「二一世紀日本の構想懇談会」が設けられ、私もその末席を汚がした。座長には日文研二代目所長の河合隼雄さんが就き、一夜山王下のイタリアンを貸し切って、我々ペーペーの研究者と事務局の若手官僚をもてなして下さったことが、強く印象に残っている。ここでは、ダジャレの名人の真骨頂を発揮された。座は常に笑いで満たされていた。河合さんはじつにさりげなく私に「日文研、お見捨てなきよう」と言われた。ああこの方はすべてお見通しだと背筋がゾクッとした。

しばしそれから時が経過する。三度目の正直となったのは、二〇一〇年も末のこと。時は熟

せりとばかり今度は私の方から打って出た。阪大時代から交流のあった旧知の猪木武徳所長に、六〇才で東大先端研をやめるので、日文研客員教授に応募して「建築と政治」のプロジェクトをやりたいと、率直に申し出た。猪木さんはたちどころに手を打ってくれて、無事に採用になったのが、冒頭の話ということになる。猪木さんは、これまた人文研時代から旧知の井上章一さんを幹事にと手筈を整えてくれた。一年先の退職を前に、今度こそと決意を新たにした。しかし人の運命とはわからぬものだ。その前に日文研の神様との出会いが生まれたのだから。そう、三・一一だ。あの東日本大震災がおこった。四月に菅首相は「復興構想会議」を創設。木村さんの報告書に阪神淡路大震災の「復興委員会」のことを書いたせいか、運命のイタズラとはこのことか、私は五百旗頭真議長に頼まれ、議長代理を命ぜられた。すると、日文研創設者の梅原猛さんが何と名誉議長Ⅱ特別顧問として参加されると分かった。まずはどう接していいのか、皆目見当がつかなかった。五百旗頭さんは『神様』と公然と名づけられたが、果たして如何。とにかく梅原さんの登場は強烈だった。「文明災としての東日本大震災」と言うてさながらスーパースター歌舞伎の大御所的存在として臨まれ、会議は千波万波の波の間に間に揺れ動いた。ありていに言って、梅原さんは五百旗頭―私―飯尾潤の政治学トリオに飽き足りないものを感じておられたのだ。

「提言の文章は、社会科学者ではダメ。あの手の文体では人の心を打たぬ」。これが梅原さんの一貫した態度だった。これを無視は出来ない。そんな中、成りゆきから私が起草者に。うむ。果たして梅原さんの試験に合格する文章なんて書けるのか。役人用語でダメなのは分かるが。六月の一日から一週間、私は深夜に起きて文章を練り、昼間は事務局での調整にあたる日々を過ごした。仮想敵、いや実際に私の前に対峙しているのは、梅原神様なのだから。ツキ

モノが付くためには、夜遅くでなければ無理と、強迫神経症的に思いこむようになっていた。これはしたり、梅原神様が乗り移ったのか否か。

馬原神様に代表される会議の文人派の「思い」をいかに「提言」に生かすか。私はついに割り切った。これは「詩のリズム」でいくしかない。書き上げた「提言前文」を、会議の前日に事務局から梅原さんに祈るような気持ちで送った。すぐにご嘉納になった。「これでよし」と。翌日、梅原さんは会議に臨んで「古風で大時代的だが、社会科学者に詩が書けるとは思わなかった。」やはり一人で書いて御厨節を通してよかった」「八十点」との御託宣。晴れて日文研の神様から合格証をもらえた。実は本番の会議でも、私が詩のリズムでこれを音読した。梅原さんへの挑戦のおかげで、私は政治は演技であり、舞台で演じられるものであるコトを自ら体験することができた。

その後、一年がたち、日文研のプロジェクトのため上洛の機会は多くなったが、梅原さんにはお会いしてない。神様とのやりとりはまさしく一期一会だったとの思いがずっと心に残っているからだ。とまれ、私の中の日文研はふり返って見ると、ずしりと重い存在感を持っている。ずっと外縁に連なってきたが、その日文研卒業の日も近い。プロジェクトの論文集が出来上がったら、「ありがとう、そしてさようなら」と、人っ子一人いない日文研の回廊でつぶやいてみたい。

（国際日本文化研究センター客員教授）